

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo42（2016年12月号）

年の瀬の慌ただしい頃、一年の時の経過のはやさにいささか焦りを覚えずに入られません、みなさま、いかがお過ごしでしょうか。現在、次号『Intelligence』第17号の発行に向けて、編集委員会では順調に編集作業を進めております。来春、お手元に届きますことを楽しみにお待ちしております。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第107回20世紀メディア研究会】（11月26日（土）午後2時30分～5時30分）

第107回研究会では、お三方にご発表いただきました。

- ① 山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所理事長）「老書生7つのつぶやき—『日本のインテリジェンス工作』（新曜社）の上梓に際し」は、山本先生の新刊書刊行に関連して、1. ブラック労働の回避、2. 身銭を切る、3. 一次資料の発掘、4. 資料保存空間の確保、5. データベースのアナログ的活用、6. 流行を追うな— 桃栗3年、柿8年、7. 帰納法、といった項目を「7つのつぶやき」として披瀝、これまで研究生活50年間の知見、知恵として紹介されました。
- ② イン・シセキ（名古屋大学大学院文学研究科・博士研究員）「冷戦下の中国における日本書籍の『内部発行』」は、言論統制が敷かれていた1950年代から1970年代の中国で、党幹部者をはじめとする一部の階層を対象とした「内部発行」という出版形態が存在したことを研究報告してくださいました。小林多喜二や宮本百合子といった、主に戦前のプロレタリア文学作家による作品は、中国共産党の理念と一致することから「公開出版」の形態で翻訳紹介が成されていたが、例えば60年前後の日本で登場する「社会派ミステリー」の代表作家、松本清張の作品は、「内部発行」にて中国に紹介されました。発表者は、博士論文にて80年代にて起こる松本清張ブームを扱うなかで、一群の「内部発行」された書籍の存在に気づき、本発表ではそこに関わった翻訳者、また読者の位相についての報告を行いました。

- ③ 田中道子 (エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学・教授) 「メキシコおよびスペイン語圏の日本研究の歴史と現在」は、報告者の 49 年間のメキシコ在住の経験とブラジル、メキシコ等の研究機関における日本研究のありかたを紹介した。また、勤務先であるエル・コレヒオ・デ・メヒコ大学での日本研究プログラムの発展段階を、1964～72 年、73～83 年、84～97 年、98～2016 年、の 4 つに区分、50 周年を迎えた同大のプログラムの特色についても紹介、同時に日本からも客員教授として招聘された研究者の方々との交流についても報告されました。

次回研究会は 12 月 23 日金曜日、早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館 909 号室にて、本間理絵さん、八尾祥平さん、鈴木貴宇さんのお三方が報告していただきます。

以後、2017 年 1 月 28 日、3 月 18 日、4 月 29 日、5 月 27 日、6 月 24 日と研究例会を予定しております。ご発表希望者の方は事務局までおしらせください。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、すでに第十回を重ねております。このブログのエッセイの執筆希望者を、講読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。 <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【コラム：今年の収穫】学生との会話のネタにと次々にこの夏から秋、冬にかけて「シン・ゴジラ」「君の名は。」「この世界の片隅に」を鑑賞。日本映画界が、今年、尻上がりにこれでもか！とヒット作を生み出し得たことにおどろく。日本映画は日本の観客だけ相手にしてそこそこやっているからダメなんだという前世代の批評家の危惧をよそに、海外の映画賞狙いで延命を図るとか、グローバル化などとフラフラ海外に出て行くより、中国をはじめアジアの資本をこちらに呼び込むことのできる製作をした方が（それができるなら）それに越したことはない。この三作はいずれも 311 後の日本の世界像、歴史像を織り込んでいて、各時代の世界の解体や恐怖から目を背けることがない。バカバカしい「絆」の強調もなければ、食べて応援やらなんやらの、つまり、地上波テレビや大新聞が撒

き散らす私たちを窒息させそうな「善意」の顔をしたプロパガンダもない。テレビや新聞メディアが自粛の果てに追い出した物語が映画メディアにはあり、その物語を無意識に欲している観客がかなりの程度存在している。311 後の日本のテレビや新聞の安全神話や忍耐の共同性の物語が国境を越える普遍性を持つことはあり得ないが、たとえば「君の名は。」なら越えていけそうだ。転転と移ろう木漏れ日や、都会の歩道を濡らす雨など、日常の風景をデリケートに表象するアニメ技術も（ディズニーとは対極の方向を選んで、ジブリを凌駕した）すばらしかった。

(2016年12月12日 文責 川崎賢子)